けんせつ

東京土建のホームページ　http://www.tokyo-doken.or.jp/

印刷部数11万2600部
（購読料は組合費のなかに含まれています）
（年間購読料　千八百円）
定価　五十円

東京都新宿区北新宿1-8-16
東京土建一般労働組合
電話03（5332）3971（代表）
FAX03（5332）3972
発行人・編集人
三木　勉

高速料金割引制度取り扱い

事業協同組合と提携し、高速道路（NEXCO・首都高速）の利用に応じて最大30%（首都高20%）の割引が、出資金1000円で受けられます。詳細は8月末に配布するチラシを参照してください。

戦場からの“命の便り”を読む

新井 勝紘　元専修大学教授

年間4億通超の軍事郵便
日本の戦争考える歴史資料

7月16日に開催した平和共同取材で「戦場からの〝命の便り〟を読む」と題して、兵士が家族などに宛てた軍事郵便について、新井勝紘元専修大学教授が講演しました。内容の一部を紹介します。（文責・見出しは編集部）

新井さん

日本では日清戦争の時に初めて軍事郵便制度ができました。1894年に軍事郵便取扱細則とか、野戦郵便物差立手続という形で整備されます。最も飛躍的に軍事郵便の制度が整ったのはそれから10年後です。1904年、軍事郵便規則ができて、外地に野戦郵便局ができ、そこを中継して郵便を配達しました。これは日露戦争の時です。

日清戦争の時は内地から706万通余り。戦地から533万通余り。1200万通ぐらいですけれども、日露戦争になると2億2000万。戦地からも2億3000万。両方で4億5000万。桁違いに増えたということはそれだけ日露戦争は各村から兵士が動員されたということです。軍事郵便はそういう意味で、日露戦争が一つの大きな画期になったのかなと思います。当然その後の日中戦争とかアジア・太平洋戦争時も大体3億通から4億通ですが、18年、19年、20年は戦争が厳しくなりましたから、郵便が届けられるというような状況ではだんだんなくなってきます。

積み重なる戦争の体験

軍事郵便をどう評価したらいいのか。当時の日本人にとってみると初めての海外体験です。それから初めて肉親へ手紙を書く。それから戦地で見聞したこと。中国や朝鮮やアジア諸国を見て、日本の国とどう違うのか。それから戦争体験の実態。

軍事郵便を実際に手に取ってみる

1人の兵士がどのような戦争体験をしたのかということを考えた時に、この軍事郵便というのは非常に大事な貴重な資料です。日本人は死んだ兵士も含めて何百万人という兵士が参加しているわけですから、そういう人の体験の積み重ねが日本人の戦争体験の一つじゃないでしょうか。

虐殺事件が明らかに

毎日新聞が中国の銭家草というところに行って取材している。その村には、碑が建っています。「銭家草惨案」と書いてあり、銭家草虐殺事件ということだろうと思います。現地ではその村の人たちが殺された70数人の人たちのことを悼んで、小さな碑ですけれども建てられていて、その村ではこの事件を忘れたことがない。日本人は誰一人このことについて触れた人もいませんでした。しかしたまたま私が読んだ軍事郵便がきっかけになって、今でも銭家草事件といえば歴史の中に記録されるようになりました。

軍事郵便の中にも、そういう新しい歴史的な事実となるものを、何か書いている人、あるいは直接は書いていなくても、そのヒントを与えているようなものがある可能性があるので、軍事郵便というものは大切です。日本がどんな戦争をして、日本人がどんな戦争体験をしてきたのか。それを次の世代に何を伝えようとするかという時の、大事な貴重な歴史資料として考えてみる必要があるのではないかなと思います。

忘れてはいけない戦争体験の記憶

防空壕から赤い空
多摩・稲城の江田靖史さん

江田さん

【多摩・稲城・塗装・江田靖史記】太平洋戦争敗戦の日、私は国民学校2年生（小学校2年生）でした。靖国神社の春の祭りの生まれ、靖史と名付けられ、軍人となって国に尽くすようにと教えを受け、神風が吹いて戦争に必ず勝つと思っていました。

物心がついてはっきり覚えているのは、3月10日の下町大空襲です。港区白金の町工場街に住んでいた私は、防空壕に入るときに空を見上げると真っ赤でした。あの空は一生に一度きりの光景でした。朝になって、ものすごい数の家が焼け、死者がたくさん出たことを知りました。

勝つと思っていた戦争の終わりは、8月15日、突然やってきました。食料さがしは次の日から始まりました。買い出しは家族で手分けして行っていました。物不足とものすごいインフレ、紙幣など信用されず物々交換、買い出しが帰ってくるのを待って夕食の支度でした。主食はジャガイモ、かぼちゃ、さつまいもなどで、米など全く食べられません。食事抜きのこともありました。量も少ないので年中お腹が空いていました。

私が幸運にも戦災孤児にもならず今日まで生きられたのは、餓死していった戦災孤児達が「生きよ」と後押ししてくれた代表なのではないかと思うのです。

今日の平和は多大な犠牲を払ったものです。戦争をしては絶対にいけません。

足あるかと言われた父
日野の西村滋雄さん

西村さん

【日野・電工・西村滋雄通信員】今、親父は100歳。今年安倍さんから（国から）市や県から100歳の祝いをいただいた。親父はそれを素直に喜んでいた。

10代後半から20代にかけて日本が始めた戦争に呼ばれ、そして命からがら国に帰ってきた。その時、親父の母に言われたそうだ。「足があるか？」と。帰国した頃はもう30歳に近かった。彼の戦争の始まりは中国、そして一度帰国して次にはマレー半島、フィリピン、終戦へと続く。

彼が戦争のことを語り始めたのは60代を過ぎた、戦友達の会に参加した頃からだった。マレー半島を陥落させた時、アメリカの将軍が白旗を掲げてキャデラックで堂々と引き上げた話。この時彼は「この戦い、日本は負ける」と思ったという。またアメリカと対峙していた時、日本兵が一発撃つと、何百発もの返礼が来たという話。彼はその後、足を撃たれ、病院に入り、終戦を迎え、命が助かった。足は無くならなかった。彼は戦争の酷さを話すことはあっても、自分にとってこの戦争はどうだったのかを話さなかった。戦争は絶対にしてはいけないと話すだけだった。

朝やけ

■原水禁大会の空き時間に広島平和記念公園を訪れた。平和祈念資料館は大盛況で、中・高生と思しき団体もあれば、外国人もかなり多い。本館はリニューアル中で、見学できるのは東館だけだが、被爆者の写真や遺品を通して、原爆の被害の実態がつかめるようになっている。核兵器廃絶実現に向けた動きの展示では、昨年、国連で採択された核兵器禁止条約についても解説され、1階では核兵器禁止条約批准国が14カ国になったとの表示のもとに、平和首長会議が呼びかける「『核兵器禁止条約』の早期締結を求める署名」が置かれていた。

■広島平和宣言では、核抑止や核の傘は危険なものと断じ、日本政府に対して核兵器禁止条約の発効に向けた流れの中で、役割を果たしていただきたいと述べ、長崎平和宣言では300を超える地方議会が条約の署名と批准を求める声をあげているとして、日本政府に対して条約に賛同し、道義的責任を果たせと求めた。

■両市の平和記念式典で、安倍首相は核兵器禁止条約には一言も触れず、我が国は核兵器国と非核兵器国の橋渡しに努めるとした。広島の式典後の記者会見で核兵器禁止条約に参加しないと表明する安倍首相。核兵器国の側へ橋を渡りきってしまって、どうして橋渡しができるだろうか。